



盲目的に
Blindly
H52cm×W47cm×D100cm
陶、錫粉
2021 年

はじめに

本論文では陶芸分野において数多くの作品のモチーフとなってきた動物造形を時代別に調査し、その造形形態の変遷から制作背景・意図と動物造形表現の関係性について考察していく。陶芸において動物を題材とした作品は古代から現代に至るまで多数存在しており、陶芸の長い歴史において様々な形状のものが作られてきた。動物造形を作るにあたっての目的・背景の違いは動物造形表現にも影響するのではないかという筆者の仮説をもとに、古代から現代陶芸における作品を調査することで、歴史的な制作背景ないし作家の制作意図と造形表現の関係性、そしてその変遷を分析することで、自身の制作にも活かすことができる動物表現の可能性を模索することを本論の目的とする。

第 1 章 現代以前の動物表造形

21 世紀以降を現代とし、現代以前の特徴的な動物造形が見られる時代をいくつか取り上げていく。各時代において造形されている動物の種類やそれらが作られた歴史的背景と意図や、動物造形に見られる形態の特徴やモチーフの傾向を記す。縄文時代に作られた動物形土製品、古墳時代の動物形の形象埴輪、江戸時代から明治にかけて生産された土人形、明治時代の輸出工芸品に見られた立体的な動物造形、そして動物をかたどった陶彫作品について述べていく。

縄文や埴輪時代における動物造形は主に狩猟儀礼や鎮魂などの人間の「祈り」を目的として作られていた。造形物のモチーフとなる動物はその時代において人に身近であった哺乳類や鳥類が大部分を占めており、それぞれの動物は祈りの象徴的な意味を持っていると考えられていた。また動物そのものの他に動物である特定の場面を再現することも重要視していたため、モチーフの姿勢や表情の描写は当時のやきもの技術を加味してもかなり具象的に行われていた。

時代が進むと動物造形は次第に祈りの

ための品から、他者への土産物や輸出品などと言った愛玩を目的とした造形へと変わっていった。江戸時代の土人形は来訪者向けに型成形で作られた色鮮やかな干支などの縁起物の動物をつくり、明治の輸出工芸では西洋諸国の趣向に合わせ、超絶技巧を用いた絢爛豪華な動物造形作品が作られていた。このように愛玩目的の動物造形は生産性や鑑賞者の好みに応えるための技法と造形表現が用いられた結果生み出された形態であった。

その後陶芸は工芸品生産だけでなく、作家の心情や価値観を映し出す芸術として認められるようになり、それに伴って現代の動物造形作品も一気に多様化したと考えた。

第 2 章 現代における動物造形

本章では動物造形を取り扱う現代の陶芸作家を題材に使用している制作の目的ごとに分類し、それぞれの動物造形作品の制作意図と形態の特徴の関係性を述べていく。21 世紀以降、動物造形作品のモチーフや技法はますます多様化していき、一概に動物表現と言ってもその表現方法も様々である。実物と見間違ふほどリアルに作り込まれたものから、作家独自のデフォルメされた形状をしている抽象的造形のものまで多種多様である。

現代陶芸作家の中でも動物作品を取り扱うものの制作動機や表現目的を調査した結果、現代において動物造形作品は①特定のモチーフに熱中し精通した結果生まれた造形、すなわち「動物を‘再現’するための造形」が行われている作品と②動物を形作ることが主体ではなく作家自身の心情の表現、疑問を感じる概念の自己解釈や作家がもつ独自の世界観を創造すること目的にした作陶を突き詰めた結果、それらを動物の形へ投影した作品に分類することができると考えた。①に分類される作品は昆虫や魚類など、人間の構造からかけ離れた動物を選ぶ傾向が見られた。またモチーフの高い描写力と、ただの模倣ではない写実性と作家の創造性の絶妙なバランスによる造形表現を行

なっているという類似性も見られた。一方で②に分類される作品はモチーフの根本的な構造は大きく変えない①の作品とは異なり元となった動物の基本的構造にとらわれず、比較的大胆にデフォルメや他要素の付け足しを行う傾向があった。このように制作目的別に分類した際に、各分類ある一定の共通点が見られるため、動物表現における造形形態は制作意図に影響される要素もあると結論づけた。

第 3 章 作品「盲目的に」制作報告書

3 章では以上の研究内容を踏まえ、修了作品「盲目的に」の制作過程及び制作報告について述べていった。

動物造形は制作意図の違いとそれを効果的に伝えるための表現を追求した結果、作品が作られた目的ごとに共通する造形形態の特徴があると考えた。その分析を踏まえ、本作品はどちらかといえば具象的にカエルを表現しているが、その理由としては今回の作品では鑑賞者に‘カエルらしい’造形的な魅力と生き物が持つ生々しさを直接的に伝えることを目的に制作を試みた。

おわりに

祈りの形、愛玩の形、そして自己表現の形。時代ごとに異なる制作目的がどのように作品の造形形態に影響を与えてきたか研究したことによって、各動物造形作品の表現とその妥当性に対する理解が深まったと感じた。また今回得た知見によって筆者が制作を行う時、自身の作品がどういった技法を使いどのような動物表現を見せたいのか、以前よりも容易に客観的に分析することが可能となった。

動物造形は新しい技法の開発などによって、おそらく今後もその表現の幅を広げていくだろう。筆者自身の制作においても現在とは異なるコンセプトで制作をした場合、表現技法にどういった違いがみられるかなど、今後の制作で新たな動物表現を模索していくことを今後の課題とする。